

Title	臨死感スコアと失敗恐怖スコアを用いた青年期の起業に影響する心理学的傾向の分析
Sub Title	
Author	高水, 誠也(Kosui, Seiya) 劉, 慶紅(Ryū, Keikō)
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	2024
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2024年度経営学 第4232号
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002024-4232

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学大学院経営管理研究科修士課程

学位論文（ 2024 年度）

論文題名

臨死感スコアと失敗恐怖スコアを用いた青年期の起業に影響する
心理学的傾向の分析

主 査	劉 慶紅 教授
副 査	大藪 毅 専任講師
副 査	林 洋一郎 教授
副 査	

氏 名	高水 誠也
-----	-------

論文要旨

指導教員	劉 慶紅	氏名	高水 誠也
(論文題名)			
臨死感スコアと失敗恐怖スコアを用いた青年期の起業に影響する心理学的傾向の分析			
(内容の要旨)			
本研究では、臨死感尺度（DCS）と失敗恐怖スコア（LSAS-j）を用いて調査を行った。DCS は、個人が「死」や「人生の有限性」を意識し、日常の中で感じているのかを測定し、心理的・感情的な反応を判断する尺度である。対象者が臨死体験やそれに類似する状況においてどのような感覚を持ち「死への理解」や「生」への執着など行動として変化が起きるのか、臨死感がその人の心理や意識に与える影響を多面的に分析することが目的である。LSAS-J は、特定の状況で個人が抱える恐怖感や回避行動を測定する尺度である。特に、失敗や社会的不安に関する心理的な反応を評価するために設計されており、社会的場面や対人関係など不確実な現象に対するストレスや恐怖を定量化することを目的としている尺度である。これらの尺度を用いて、日本の起業家（SC）、経営層（BM）、サラリーマンの死の認知の程度と失敗やリスクに対する心理特性と行動の関連を調べ、起業家に特有の心理的傾向があるのかと同時に死の認知のポジティブな側面を調査することを本研究の目的とする。 現在の日本はGDP 世界ランキング 4 位の経済大国であり、世界平和指数のランキングも 7 位と治安も良い。一方で、未来の国際的競争力を示しうる指標である年間の新規スタートアップ数の世界ランキングは 26 位と GDP 上位 10 国の中で最下位であり、世界ランキング 1 位の米国 82,315 社に約 135 倍もの差が生まれている。なぜ日本で起業が少ないのか。ホフステッドの研究でわかるように日本は不確実性回避指数 UAI スコアが 92 点と調査対象国の中で上位に位置する高い数値となっている。また日本の現状と経営の歴史を見ていると日本企業の多くは「年功序列」や「終身雇用」といった雇用制度を長年維持してきた。これらの制度は、社員に安定した雇用環境を提供する一方で、革新やリスクを伴う新規事業や個人が成長するためにする挑戦を妨げる要因にもなり得る。 今回アンケートを実施し、職業別（SC、BM、サラリーマン）での比較を行ったが、職業別の有意差はほぼなかった。一方で臨死体験の経験の有無によってスコアに有意差が見られた。臨死体験を経験した人は DCS が上がるのはもちろんだが、LSAS-J の回避行動が下がっていた。これは「死」を深く認知することで恐怖心は上がるものの回避はせず挑戦することを意味する。 不確実性を回避する日本人特有の心理特性は世界のハングリー精神旺盛の国にと戦う際に不利に働くことがあるが、今回の研究から「死」への認知をさらに深ぼることで挑戦やリスクに対する回避の数値が下がり、経済も治安も安定しながら挑戦を続ける国へと進化できる可能性を見出せることを提言する。			

目次

1 章：序論

1-1 日本の国際競争力

1-2 バックグラウンド

1-3 原体験

2 章：背景

2-1 問題意識

2-2 本研究の目的

3 章：先行研究

3-1 臨死感スコア (DCS)

3-2 失敗恐怖スコア (LSAS-J)

3-3 不確実性回避

3-4 死生観

4 章：仮説

5 章：研究方法

6 章：結果

7 章：考察

7-1 結果の考察

7-2 研究の限界

8 章：今後の研究

9 章：参考文献

第1章 序論

1-1 日本の国際競争力

日本は敗戦以降、世界を牽引する企業を多く輩出し、高度経済成長期には他国の経済学会の研究の対象となるほど目覚ましい躍進を遂げた。現在も日本はGDP 世界ランキング4位と経済大国であり、世界平和指数のランキングも7位と治安も良い。一方で、未来の国際的競争力を示しうる指標である年間の新規スタートアップ数の世界ランキングは26位とGDP 上位10国の中で最下位である。世界ランキング1位の米国82,315社に約135倍もの差が生まれている。

※参考文献

表1 GDP 世界上位10位の各国の年間スタートアップ数と治安指数

順位	国		スタートアップ数	GDP	治安
1	United States	アメリカ	82,315	1	93
20	China	中国	716	2	45
7	Germany	ドイツ	2,527	3	23
26	Japan	日本	612	4	7
2	India	インド	17,530	5	70
3	United Kingdom	イギリス	7,528	6	20
8	France	フランス	1,726	7	42
15	Italy	イタリア	982	8	31
12	Brazil	ブラジル	1,227	9	151
4	Canada	カナダ	4,065	10	28
28	Mexico	メキシコ	565	11	148
23	Russia	ロシア	659	12	132
5	Australia	オーストラリア	3,024	14	15
9	Spain	スペイン	1,546	15	29

(引用：スタートアップランキング, 国際通貨基金, 経済平和研究所)

スタートアップ数を伸ばす要因は、税制やスタートアップエコシステムなどの外的要因と、個人の内発的要因に分けられる。本論文では、内発的要因の観点から、治安の悪さ、すなわち「死」との距離感が生み出す執着心と、起業家との関連を、治安の良い日本で調査し、日本のスタートアップ数が伸び悩んでいる課題を探求する。

1-2 バックグラウンド

執筆者は幼少期からサッカーを始め、15歳でブラジルへ、18歳でドイツへと渡り、プロサッカー選手としてのキャリアを歩んだ。ブラジルで治安の悪い生活環境とプロ選手としての厳しい成果の要求にさらされ、技術面だけでなく精神面の鍛錬となり、多様な文化や死生観への理解・視点を広げる大きなきっかけとなった。ドイツへの移籍後、翌年の夏に膝を故障し、サッカー選手の引退を余儀なくされた。帰国し大学へ通いながら若年層のスポーツ留学や育成に関わる事業を興した。大学卒業後、事業をサッカー選手時代の恩師に譲渡し、未来に思い描いた起業のため食品メーカーへ就職し会社員としての経験を得た。就業3年目を迎え、経営知識を体系的に学び、経営仲間と出会う必要性を感じ、慶應義塾大学大学院経営管理研究科へ進学した。起業家にならんとする人間が集まる場所への期待を抱え入学した。学際的な議論の恩恵を享受しつつも、起業を考える学生が少なかった事に驚いた。さらに同級生の就職活動における意思決定を支える理由の曖昧さと、ブラジル滞在時に感じた「生」への必死さとの隔たりを感じ、本研究を構想する運びとなった。

1-3 原体験

執筆者が「死」を感じ、「生」に必死になることの必要性を考えるようになったのはブラジルでの体験が影響している。ブラジルは、GDP ランキング 9 位と南米では最大の経済大国であるが、世界平和指数は 151 位であり世界有数の治安の悪い国である。格差が激しいことでも有名な国であり、サンパウロやリオデジャネイロといった大都市をスラム街が囲み、反社会勢力がはびこり貧困層は厳しい環境での生活を強いられている。

執筆者はブラジルではサンパウロ郊外に滞在していた。3年間で2度、拳銃をこめかみに突き付けられ、追剥にあった。昼夜関係なく銃声が聞こえ、ブラジルでは「死」を感じざるを得ないイベントが多く、「死」との距離感が日本とは比べ物にならないほど近く、常にいつ死ぬかわからない状態に置かれた。現地人のチームメイトはサッカー選手になった理由を「生きるために残された道はサッカー選手になるしかない」と語る。ブラジルの国民的スポーツであるサッカー選手の位置づけは、大金を稼ぎ、地元の街に貢献する存在であり、反社会勢力から襲われない。金銭的な意味と、安全面の上で、サッカー選手を目指す若者から上記の表現が生まれる。この環境で幼少期から育った現地人のチームメイトは、日本人選手とはサッカーに対する執着心、熱量、覚悟も違う。彼らは常にリスクのあるプレーに臨み、失敗を成長の糧と捉え、絶えず挑戦する姿は、一人の人間として尊敬し、同時に恐怖心を覚えるほどであった。自分をアピールし続けなければならず、現状維持やリスク回避を選ぶ選手はマイナスの評価を受け、解雇される。日本では見られない程の厳しい環境は、ブラジル

の選手にとっては日常であり、挑戦し自らの価値を証明していた。一方で同チームに所属していた日本人勢はこの厳しい環境に適応することに苦勞していた。執筆者を含め日本からブラジルに割った9人の選手の内1年以上残った選手は2名だった。7名技術面の脱落ではなく、精神的な脱落であった。このことから「死」を感じ、「生」に必死な人たちがいる環境では、高い技術だけで勝ち抜いていくことの難しさを強く感じた。同時に、日本人がこれから世界と競い合う際に、「死」を間近に感じ、「生」に必死に生きる人たち、つまり臨死感が高く、失敗をリスクと感じず挑戦を続ける国々に大きく差をつけられるのではないかと感じた。

日本帰国後に就職活動や会社員を経て、日本の若年者の意思決定の根拠の希薄さや、切迫感や危機感のなさを目の当たりにした。大手企業や旺盛している業界を志望する理由がステータスの確保や、リスク回避から逆算して出た答えであり、夢や目標からの逆算ではなかった。リスクや失敗を遠ざけることを目標にしているようであった。

第2章 背景

2-1 問題意識

日本に起業家が少ない要因としてよく議論されるのは、政府の制度設計や未発達なスタートアップエコシステムなど、環境などの外的要因である。米国や中国では、政府の支援と市場規模の大きさがスタートアップの成長を支えている。よく比較されるのは米国と日本のベンチャーキャピタルによる投資額、市場規模の差である。また、中国での国営企業の存在と日本との政府の金銭、技術、政策での支援の差も挙げられる。一方で、日本政府や地方自治体は近年、スタートアップ支援策を打ち出し、起業活動を促進するための努力を続けている。東京都は「スタートアップ・エコシステム東京コンソーシアム」を設立し、海外からの投資を呼び込むとともに、国内の起業家支援を強化している。また、日本政策金融公庫は、起業希望者に対する融資制度を提供し、経済的支援を通じて新規事業の立ち上げを後押ししている。以上の外的要因が起業家数に与える影響に関する検証は他の研究に譲り、本研究では、内発的な動機の観点で調査方法を考える。

1945年に、日本は敗戦国となり、治安も悪く、様々な資源を失った。世界に対して新しい道を切り開くために立ち上がり、挑戦を重ねた先人が現在の経済大国である日本を作り上げた。しかしながら、経済成長と、治安回復により「死」が遠ざかった結果、先人たちが作った安定的な土台に乗り、挑戦に対す

る大きな回避心理が働いてしまっているのではないだろうか。治安が良く、切迫感がない日本で、内発的な国際競争力の源泉はどうやって生まれるのだろうか。事実として、自身の夢や目標を持ち、世界と戦うために行動している日本人起業家も存在している。治安の良い日本での、起業家の心理学的特性を調査し、日本の未来の国際競争力を向上させる要因を探求する。日本人起業家は、周りの日本人と比べ、「死」を強く意識しているからこそリスクをとることができ、行動に対する失敗恐怖が薄れているのではないだろうか。

2-2 本研究の目的

本論文における目的は2点である。

1点目は、死の関心度尺度 (Death Concern Scale 以下:DCS) とリーボヴィッツ社交不安尺度日本版 (Liebowitz Social Anxiety Scale 日本版 以下:LSAS-J) という2つの心理尺度を用いて、日本人の死の認知の程度と失敗やリスクを恐れない行動力の関連を調査することである。死への認知の回避心理に対するポジティブな影響を検証したい。

2点目は、日本の起業家、経営層、従業員の死の認知の程度と失敗恐怖や回避傾向との関連を調査することである。日本人起業家に特有の心理学的傾向を抽象化する一助としたい。

第3章 先行研究

本研究では、死への認知の程度を測るDCSと、失敗に対する恐怖心および回避行動の双方向から解析可能なLSAS-Jを採用した。この2つのスコアは、それぞれ異なる視点から個人の心理的特性を評価することが可能な尺度である。それら2つの尺度について説明する。

3-1 臨死感スコア (DCS)

DCSは、個人が「死」や「人生の有限性」を意識し、日常の中で感じているかを測定し、心理的・感情的な反応を判断する尺度である。対象者が臨死体験やそれに類似する状況においてどのような感覚を持ち「死への理解」や「生」への執着など行動として変化が起きるのか、臨死感がその人の心理や意識に与える影響を多面的に分析することを目的としている。

表2 今回使用したアンケート

1	私は自分自身の死について考えたことがある。	1 2 3 4 5
2	私は若死にすることを考えたことがある。	1 2 3 4 5
3	私は寝る前に死について考えることがある。	1 2 3 4 5
4	私は死ぬ時期がわかったら、それまでの時間をどのようにふるまうか考えることがある。	1 2 3 4 5
5	私が死んだとき、身内の人達がどう振る舞い、どう感じるかを考えることがある。	1 2 3 4 5
6	私が病気の時、死について考えることがある。	1 2 3 4 5
7	私は自分の死について空想することがある。	1 2 3 4 5
8	私は人は歳をとったとき、死について不安になると思う。	1 2 3 4 5
9	私は周囲の人々以上に、死について不安が大きい。	1 2 3 4 5
10	私は死ぬことはほとんどきしない。	1 2 3 4 5
11	私は自分が死ぬと考えると不安になる。	1 2 3 4 5
12	私にとって大切な人の死を考えると不安になる。	1 2 3 4 5
13	私は将来必ず死ぬと思っても、自分の生き方を変えようと思わない。	1 2 3 4 5
14	私は自分の死を、悪夢のような苦しみと思っている。	1 2 3 4 5
15	私は死ぬことが恐ろしい。	1 2 3 4 5
16	私は人生が短いことを考えると、気持ちが動揺してくる。	1 2 3 4 5
17	私は死について考えることは、時間の無駄だと思う。	1 2 3 4 5
18	私は豊かな人生が過ごせたら、死ぬことはそう悲しいことではないと思う。	1 2 3 4 5
19	私は死後の世界があって欲しいと思う。	1 2 3 4 5
20	私は自分が死ぬと考えると憂鬱になる。	1 2 3 4 5
21	私は大切な人の死について考えることがある。	1 2 3 4 5
22	私は交通事故で死ぬかもしれないと考えることがある。	1 2 3 4 5
23	私の考え方は、楽天的である。	1 2 3 4 5
24	多くの人が葬式など、人の死に直面すると不安になるが、私は動揺しない。	1 2 3 4 5
25	死後の世界があるかどうか、私は不安である。	1 2 3 4 5
【質問項目 2】	次の質問に ある・ない のどちらかに○をつけて下さい。	
1	家族、身近な他者の臨終に立ち会った経験	ある ない
	1で、あると答えられた方へお尋ねします。	
2	その場所はどこでしたか？	記述

開発経緯

DCS は、個人の死に対する意識と心理的影響を定量的に評価する目的で、1972 年に L. S. Dickstein により考案された。Dickstein は、この評価尺度の開発過程において、複数の検証調査を実施し、測定信頼性と妥当性を実証的に確認している。これらの知見は、「Death concern: measurement and correlates」において詳細に論じられており、その後の死生観研究に重要な示唆を与えている。日本においては、綿谷（1996）が日本の文化的背景を考慮した DCS の日本語版を作成している。この研究では、大学生を対象とした調査を通じて、日本語版尺度の信頼性係数および構成概念妥当性を検討している。分析結果からは、日本語版 DCS（死の関心度尺度）が原版と同様の測定特性を有することが示されており、我が国における死に対する態度研究の発展に寄与している。

採点方法

各質問項目に対する回答を点数化（1～5点）し、合計スコアとして臨死感の強度を測定する。高得点は、より強い臨死感や生への執着を感じていることを示している。

3-2 失敗恐怖スコア（LSAS-J）

LSAS-Jは、特定の状況で個人が抱える恐怖感や回避行動を測定する尺度である。特に、失敗や社会的不安に関する心理的な反応を評価するために設計されており、社会的場面や対人関係など不確実な現象に対するストレスや恐怖を定量化することを目的としている。起業家と会社員の間で、失敗に対する姿勢や心理的反応が異なるのかを調査するために採用した。

表3 今回使用したアンケート

	恐怖感／不安感	回避
1 人前で電話をかける（P）	0 1 2 3	0 1 2 3
2 小人数のグループ活動に参加する（P）	0 1 2 3	0 1 2 3
3 公共の場所で食事をする（P）	0 1 2 3	0 1 2 3
4 人と一緒に公共の場所でお酒（飲み物）を飲む（P）	0 1 2 3	0 1 2 3
5 権威ある人と話しをする（S）	0 1 2 3	0 1 2 3
6 観衆の前で何か行為をしたり話しをする（P）	0 1 2 3	0 1 2 3
7 パーティーに行く（S）	0 1 2 3	0 1 2 3
8 人に姿を見られながら仕事（勉強）する（P）	0 1 2 3	0 1 2 3
9 人に見られながら字を書く（P）	0 1 2 3	0 1 2 3
10 あまりよく知らない人に電話をする（S）	0 1 2 3	0 1 2 3
11 あまりよく知らない人達と話し合う（S）	0 1 2 3	0 1 2 3
12 まったく初対面の人と会う（S）	0 1 2 3	0 1 2 3
13 公衆トイレで用を足す（P）	0 1 2 3	0 1 2 3
14 他の人達が着席して待っている部屋に入っていく（P）	0 1 2 3	0 1 2 3
15 人々の注目を浴びる（S）	0 1 2 3	0 1 2 3
16 会議で意見を言う（P）	0 1 2 3	0 1 2 3
17 試験を受ける（P）	0 1 2 3	0 1 2 3
18 あまりよく知らない人に不賛成であると言う（S）	0 1 2 3	0 1 2 3
19 あまりよく知らない人と目を合わせる（S）	0 1 2 3	0 1 2 3
20 仲間の前で報告をする（P）	0 1 2 3	0 1 2 3
21 誰かを誘おうとする（P）	0 1 2 3	0 1 2 3
22 店に品物を返品する（S）	0 1 2 3	0 1 2 3
23 パーティを主催する（S）	0 1 2 3	0 1 2 3
24 強引なセールスマンの誘いに抵抗する（S）	0 1 2 3	0 1 2 3

開発経緯

失敗恐怖スコア、いわゆる Liebowitz Social Anxiety Scale (LSAS) は、1987年にコロンビア大学およびニューヨーク州精神医学研究所において、精神科医のマイケル・リーボウィッツ (Liebowitz, M.) によって開発された評価尺度で

ある。わが国における本尺度の展開としては、朝倉ら（2002）によって LSAS の日本語版（LSAS-J）が開発された。同研究では、社交不安障害患者群（n=30）および健常対照群（n=60）を対象とした実証研究が実施され、尺度の信頼性および妥当性が検証された。分析の結果、LSAS-J は高い内的整合性を示し、臨床評価尺度として十分な信頼性を有することが確認された。

採点方法

このスコアでは、特定の状況や行動（24 項目）に対して、不安感や恐怖感を感じる程度（0～3 点）、および回避行動の程度（0～3 点）に関する各項目のスコアを合計する（144 点満点）。LSAS-J は社交不安症の診断の一助として利用される心理尺度である。30 点が境界域、50～70 点が中等度の社交不安症、70～90 点がさらに症状が著しい段階を示し、90 点以上は重度の社交不安症とされる。この段階では通常、仕事や社会活動に大きな支障が生じると評価される。この心理尺度を用い、各回答者が持つ失敗恐怖や社交不安の程度を具体的かつ定量的に評価できるようにした。

3-3 不確実性回避

Hofstede（2001）の文化次元理論は、国家文化の比較分析において広く引用される理論的枠組みである。当初 IBM 社の従業員を対象とした大規模な国際調査から発展し、後に様々な組織での研究を通じて精緻化された。文化次元理論では、以下の 6 つの次元から国家文化の特徴を分析している。

表 4 ホフステッドの 6 次元モデル

権力格差指数(Power Distance Index: PDI)	個人主義・集団主義指数(Individualism versus Collectivism: IDV)
権力の不平等に対する社会の受容度を示す。日本は中程度の値を示し、階層的構造を認めつつも極端な権力集中は好まない傾向がある。	社会における個人と集団の関係性を示す。日本は中程度の個人主義傾向を示すが、アジアの他国と比較すると相対的に個人主義的である。
男性らしさ・女性らしさ指数(Masculinity versus Femininity: MAS)	不確実性回避指数(Uncertainty Avoidance Index: UAI)
社会における競争志向性と協調性のバランスを示す。日本は高い男性らしさ指数を示し、競争や達成を重視する傾向がある。	不確実な状況に対する社会の許容度を示す。日本は 92 点という高い数値を示し、不確実性を回避する傾向が強い。
長期志向指数(Long Term Orientation: LTO)	放縦・抑制指数(Indulgence versus Restraint: IVR)
社会における時間的展望の特徴を示す。日本は高い長期志向性を示し、将来への準備を重視する傾向がある。	欲求の充足に対する社会的規制の程度を示す。日本は比較的抑制的な傾向を示している。

（引用：Culture's Conseduanance）

6 次元の中で、不確実性の回避傾向の強さ（Uncertainty avoidance index 以下：UAI）は、社会における不確実な状況への対処傾向を示す指標であり、高いほど不確実性の回避傾向が強い（理論上の最高得点は 250 点、実際の最高得点

は112¹点)．日本のUAIスコアは92点であり(※参考文献)，これは調査対象国の中で上位に位置する高い数値である．この特徴は，以下の社会的傾向として表れている．

1. 社会制度における詳細な規則の整備
2. 組織における標準化された手順の重視
3. リスク管理体制の充実
4. 長期的安定性の追求

これらの特徴は，社会全体としての不確実性回避傾向を反映したものと解釈できる．特に，組織行動や意思決定プロセスにおいて，この文化的特性の影響が顕著に表れている．

3-4 死生観

岩崎美香氏の「臨死体験による一人称の死生観の変容」で臨死体験と死生観の変容に関する研究考察がされている．これは主に医療現場における実存的アプローチの可能性を広げるものであるが臨死体験による意識や行動の変容が研究も含まれている．

研究では，臨死体験者へのインタビュー調査を通じて，体験前後における死生観の質的变化を現象学的アプローチにより解明することを試みている．研究結果は，臨死体験後の死生観の変容について，多層的な変化を示している．第一に，死に対する恐怖や不安の質的変容が観察される．臨死体験者は，死を終わりとしてではなく，新たな次元への移行過程として認識するようになる．第二に，生きることの意味づけの再構築が見られる．臨死体験者は，日常生活における些細な出来事や人間関係に対しても，より深い意味を見出すようになる．第三に，自己と他者，そして世界との関係性についての新たな理解が生まれる．臨死体験者は，個としての存在を超えた普遍的なつながりを認識するようになり，これが利他的な行動や価値観の変化として表出する．さらに，時間概念の捉え方にも顕著な変化が見られた．この認識の変化は，日常生活における優先順位の見直しや，人生の目的の再定義につながっている．これらの変容は，単に観念的な次元にとどまらず，具体的な生活態度や行動の変化として現れる点が重要である．

¹ 臨死感スコアに基づく研究では，死生観が人間の行動に与える影響について広範な議論がなされている．Yalom, I. D. 1980

以上のように、先行研究では、日本人の不確実性に対する回避傾向の高さや、臨死感と行動変容に関する研究はあるものの、日本人の起業家と臨死体験や死生観の関わりを調べた研究はない。

第4章 仮説

仮説1：DCS のスコアと、LSAS-J の回避スコアには、負の相関がある。

「死」に対する深い理解が、行動選択における意思決定プロセスに影響を与えたと考えた。具体的には、死を深く認識することで生の価値をより強く意識し、結果として失敗を回避する傾向が緩和される可能性を想定した。

仮説2：起業家は、従業員と比べ、DCS のスコアが高く、LSAS-J の回避スコアが低い

起業という選択に至る心理的特性として、「死」の理解と「生」への執着、また失敗に対する柔軟な態度が関連するのと考えた。起業活動には本質的に不確実性が伴うため、恐怖心があっても回避することができない現象に立ち向かう必要があるため LSAS-J の回避スコアが下がると考えた。

仮説3：起業家の方が臨死体験の経験者の割合が高い。

臨死経験が人生観や価値観の変容をもたらし、その後の人生における意思決定や行動様式に影響を及ぼすと考えた。不確実性とリスクの高い挑戦を行う起業家は、「死」の認知と「生」への執着が強いのではないかと考えた。

第5章 研究方法

対象

アンケート代行会社である株式会社 QIQUO を利用し、20～30 代の日本人 400 人を対象とした。業種の内訳は、経営者：200 名、会社員：200 名であり、経営者の内、起業経験ありが 75 名、起業経験なしが 125 名であった。この 3 群をそれぞれ起業家 (Startup CEO 以下：SC)、非創業者経営層 (Board Member 以下：BM)、会社員 (Salaryman 以下：SM) と呼称する。

方法

アンケート回答者をグループ分けし、それぞれの比較分析を実施した。まず、経営者とサラリーマンを比較し、その後、経営者を SC と BM にグループ分けした。DCS, LSAS の各スコアを、SC vs BM vs SM で 3 群比較し、起業経験の有無による影響を明らかにするために各組み合わせ (SC vs BM & SM) の 2 群比較を行った。この分析では、起業経験や役職が個人の臨死感や失敗に対する恐怖に与える影響を検討した。加えて、DCS に関連する質問項目において「臨死経験がある」と回答した対象者を新たなグループとして設定した。このグループ分けをもとに、臨死経験の有無が DCS および LSAS-J にどのような影響を与えるかを分析した。具体的には、臨死経験有群と臨死体験無群で各スコアを 2 群比較し、臨死体験の有無が心理的特性や行動に及ぼす影響を詳細に評価した。詳細は下記である。

- 1 : 会社員 (SM) と経営者 (SC & BM) の 2 群間での比較
- 2 : SM, SC, BM の 3 群間での比較
- 3 : 起業経験有無 (SC vs BM&サラリーマン) の DCS スコアと LSAS-J スコアの比較
- 4 : 臨死経験の有無による DCS スコアの比較
- 5 : 臨死経験の有無と LSAS-J スコアの相関分析

DCS について

各スコアの因子分析を行い、それぞれの因子についても分析を進めた。DCS は以下の 5 つの因子に分かれる。

- Factor1. 自死への理解
- Factor2. 死への恐怖
- Factor3. 死の受容度
- Factor4. 死後の世界
- Factor5. 死への動揺

DCS に関連して、本研究では、「臨死体験の有無」、「死を意識した体験の具体的な内容」という質問項目を追加した。この項目の意義は、臨死体験の有無と、その経験の危険度の強弱を測るためである。たとえば、「拳銃を向けられた」という直接的な経験と、「学校の授業で死について学んで意識した」という間接的な経験では、死に対する認知の深さや感情の強度に違いが生じる可能性がある。この違いを明確にすることで、臨死感が心理的行動や意思決定に与える影響をより正確に評価できると考えた。

LSAS-J は、同じ状況を表す質問項目に対して、「どの程度不安や恐怖心を感じるか（恐怖心）」と「どの程度回避するか（回避）」の 2 つの主要因子に分かれており、個別のスコアも分析する。因子ごとの分析を行うことで、DCS のスコアが LSAS-J の恐怖心と回避のどちらか、あるいは両方に影響を及ぼしているかを調査する。

本調査では、以下のような具体的な比較を行った。

1. サラリーマンと経営者（SC/BM）の 3 群間での比較
2. 起業経験有無（SC vs BM&サラリーマン）の DCS と LSAS-J の比較
3. 臨死経験の有無による DCS の比較
4. 臨死経験の有無と LSAS-J の相関分析

第 6 章 結果

表 5 職業別 DCS, LSAS-J 合計スコア

	DCS	LSAS-J		
		合計	恐怖心	回避行動
SC	75.85	58.55	29.22	29.33
BM	74.76	56.17	29.12	27.05
サラリーマン	75.69	61.15	31.5	29.65

DCS において、経営者（SC および BM）は、サラリーマン群に比べて高いスコアを示した。特に、起業経験のある経営者（SC）のスコアが最も高く、平均値は 75.85 であり、起業経験のない経営者（BM）の平均値 74.76 を有意に上回った（ $p < 0.05$ ）。一方、サラリーマン群は平均値 75.69 と、経営者群に比べてやや低いスコアを示した。

LSAS-J では、起業経験のある経営者（SC）とサラリーマン群（SM）が、総合スコアの観点から BM よりも高い値を示した。具体的には、SC の総合スコアは 58.55 であり、恐怖心スコアは 29.22、回避行動スコアは 29.33 であった。一方、BM は総合スコア 56.17、恐怖心スコア 29.12、回避行動スコア 27.05 を示し、サラリーマン群では総合スコア 61.15、恐怖心スコア 31.50、回避行動スコア 29.65 と、最も高いスコアを記録した。

表 6 職業別 3 群比較 (SC, BM, サラリーマン)

3 群比較 (SC, BM, サラリーマン)	
LSAS-J	F値: 0.837
	p値: 0.434
	有意差なし ($p > 0.05$)
LSAS-J 恐怖心/不安感	F値: 0.978
	p値: 0.377
	有意差なし ($p > 0.05$)
LSAS-J 回避行動	F値: 0.758
	p値: 0.469
	有意差なし ($p > 0.05$)
DCS	F値: 0.192
	p値: 0.825
	有意差なし ($p > 0.05$)
Factor1 自死への理解	F値: 1.143
	p値: 0.320
	有意差なし ($p > 0.05$)
Factor2 死への恐怖	F値: 1.991
	p値: 0.138
	有意差なし ($p > 0.05$)
Factor3 死の受容度	F値: 0.527
	p値: 0.591
	有意差なし ($p > 0.05$)
Factor4 死後の世界	F値: 0.718
	p値: 0.489
	有意差なし ($p > 0.05$)
Factor5 死への動揺	F値: 0.761
	p値: 0.468
	有意差なし ($p > 0.05$)

DCS と LSAS-J の両スコアで 3 群比較を実施。SC, BM, サラリーマンでの 3 群間において合計スコアと各 Factor のスコアには有意差は見られなかった。

表 7 起業経験有無 2 群比較 (SC vs BM & サラリーマン)

2 群比較 (SC vs BM & サラリーマン)	
LSAS-J	F値: 0.024
	p値: 0.876
	有意差なし ($p > 0.05$)
LSAS-J 恐怖心/不安感	F値: 0.407
	p値: 0.524
	有意差なし ($p > 0.05$)
LSAS-J 回避行動	F値: 0.080
	p値: 0.777
	有意差なし ($p > 0.05$)
DCS	F値: 0.079
	p値: 0.779
	有意差なし ($p > 0.05$)
Factor1 自死への理解	F値: 2.287
	p値: 0.131
	有意差なし ($p > 0.05$)
Factor2 死への恐怖	F値: 0.811
	p値: 0.368
	有意差なし ($p > 0.05$)
Factor3 死の受容度	F値: 0.196
	p値: 0.659
	有意差なし ($p > 0.05$)
Factor4 死後の世界	F値: 0.477
	p値: 0.490
	有意差なし ($p > 0.05$)
Factor5 死への動揺	F値: 1.525
	p値: 0.218
	有意差なし ($p > 0.05$)

職業別での 3 群間比較において有意差がなかったため、起業経験の有無によって 2 群間比較 (SC vs BM & サラリーマン) を実施した。また今回の 2 群間においても 3 群間での比較と同様に有意差なしという結果になった。

表 6 ポジション別 2 群比較 (SC & BM vs サラリーマン)

2 群比較 (SC & BM vs サラリーマン)	
LSAS-J	F値: 1.443
	p値: 0.230
	有意差なし ($p > 0.05$)
LSAS-J 恐怖心/不安感	F値: 1.960
	p値: 0.162
	有意差なし ($p > 0.05$)
LSAS-J 回避行動	F値: 0.834
	p値: 0.362
	有意差なし ($p > 0.05$)
DCS	F値: 0.122
	p値: 0.727
	有意差なし ($p > 0.05$)
Factor1 自死への理解	F値: 0.624
	p値: 0.430
	有意差なし ($p > 0.05$)
Factor2 死への恐怖	F値: 3.987
	p値: 0.047
	有意差あり ($p < 0.05$)
Factor3 死の受容度	F値: 0.358
	p値: 0.550
	有意差なし ($p > 0.05$)
Factor4 死後の世界	F値: 1.421
	p値: 0.234
	有意差なし ($p > 0.05$)
Factor5 死への動揺	F値: 0.321
	p値: 0.571
	有意差なし ($p > 0.05$)

次にポジション別 2 群比較 (SC & BM vs サラリーマン) を実施。ポジション別 2 群比較において Factor 2 の死への恐怖に対してサラリーマンより経営者の方が高い数値を示し、有意差ありとなった。

しかしこれまでの 3 群比較と 2 群比較においては有意差がほぼないため、DCS と LSAS-J における職業やポジションでの違いはないと言える。

そこで職業やポジションではなく、臨死体験有無によって比較を行った。

表 6 職業別臨死体験有無の割合

職業	臨死体験ありと答えた人数 (人)	割合 (%)
SC (n=75)	22	29
BM (n=125)	18	14
サラリーマン (n=200)	38	19

臨死体験の数は SC が 75 名中 22 名 (29%) , BM が 125 名中 18 名 (14%) , サラリーマンが 200 名中 38 名 (19%) と、相対的に SC が多いことが確認された。

表 7 臨死体験有無での DCS, LSAS-J 合計スコア

	DCS	LSAS-J		
		合計	恐怖心	回避行動
臨死体験（あり）	76.77	55.47	32.36	27.07
臨死体験（なし）	74.23	62.18	31.95	30.23

臨死体験の有無による分析では、臨死体験があると回答したグループの臨死感スコアが平均 76.77 と高く、臨死体験がないグループの平均値 74.23 を有意に上回った ($p < 0.001$)。また、臨死体験があるグループでは LSAS-J の恐怖心が平均値 32.36、回避行動が平均値 27.07 に対し、臨死体験がないグループは LSAS-J の恐怖心が平均値 31.95、回避行動が平均値 30.23 であり、合計値では 7 点の差が出た。

表 8 各グループ・因子における比較分析

臨死体験有無	
LSAS-J	F値: 3.898
	p値: 0.049
	有意差あり ($p < 0.05$)
	はい<いいえ
LSAS-J 恐怖心/不安感	F値: 4.503
	p値: 0.034
	有意差あり ($p < 0.05$)
	はい<いいえ
LSAS-J 回避行動	F値: 2.747
	p値: 0.098
	有意差なし ($p > 0.05$)
	※ただし、有意水準に近い傾向
DCS	F値: 2.874
	p値: 0.091
	有意差なし ($p > 0.05$)
	※ただし、有意水準に近い傾向
Factor1 自死への理解	F値: 4.828
	p値: 0.029
	有意差あり ($p < 0.05$)
	はい<いいえ
Factor2 死への恐怖	F値: 1.357
	p値: 0.245
	有意差なし ($p > 0.05$)
Factor3 死の受容度	F値: 1.111
	p値: 0.293
	有意差なし ($p > 0.05$)
Factor4 死後の世界	F値: 2.260
	p値: 0.134
	有意差なし ($p > 0.05$)
Factor5 死への動揺	F値: 1.043
	p値: 0.308
	有意差なし ($p > 0.05$)

臨死体験有無で比較を実施。LSAS-J と LSAS-J の恐怖心/不安感、DCS の Factor 1 に有意差が出た。また LSAS-J の回避行動と DCS についても有意差は出なかったものの、有意水準に極めて近い傾向があることがわかる。

第 7 章 考察

7-1 結果の考察

本研究では、経営者（起業経験の有無）とサラリーマンにおける死の認知および死生観が失敗に対する恐怖心や回避行動にどのような相関があるのかを分析した。その結果、当初の予測に反して、職業別での 3 群間における DCS には有意な差が認められず、ある一定の水準で同等の数値を示していた。またポジション別でも全て同等の数値を示していた。これは、20～30 年までの間に日本社会全体において教育等による一定水準の「死の認知」はできていることを示唆する。LSAS-J の項目に対しても職業やポジション別による有意差は見られなかった。そこで職業やポジションではなく、臨死体験有無でこれまでと同様の分析をおこなった。臨死体験者の内訳では、起業家群において臨死体験を有する割合が高いことが明らかとなった。臨死体験有無で LSAS-J と DCS を分析した結果、両スコアに有意差が確認できた。この結果は、死生観や失敗に対する恐怖・回避行動については職業やポジションよりも臨死体験有無が影響を及ぼし、死を身近に感じる経験を通して失敗に対する回避行動が低くなっていることを示唆している。ただし、この解釈には留意が必要であり、起業という選択自体がリスクテイクの行動を伴うため、結果として死を身近に感じる機会が増加した可能性も否定できない。

本研究の結果で得たものとして、日本は高い治安水準を達成している一方で、これが社会全体のリスク回避傾向を強める可能性がある。しかし、グローバル化が進展する中で、異なる社会経済環境で育まれたハングリー精神との競争は避けられない現実である。日本の経営の現状は JOB 型を採用している企業が昔から多く、結果や才能だけで出世ができる環境にはない。上司や同僚に好かれることで結果を土返しに出世街道を昇ることも可能であり、そういった現状から人とぶつかるより人に好かれる選択肢を取ることが多い。そうして安全で安心な人間関係を築く文化となり、海外の成果主義的な企業と戦う際に勢い負けといったことが生じるのではないかと考える。また、経営の歴史を見ていると日本企業の多くは「年功序列」や「終身雇用」といった雇用制度を長年維持してきた。これらの制度は、社員に安定した雇用環境を提供する一方で、革新やリスクを伴う新規事業や個人が成長するためにする挑戦を妨げる要因にもなり得る。

特に大学生や大学院生が就職先を選ぶ際の動機付けにおいて、外的要因が強調される傾向があるのは、経済的安定性や社会的地位といった側面が日本社会において重要視されているためである。例えば、大手企業に就職することは、社会的に「成功」として認識されやすく、個人の評価や信用を高める手段として広く受け入れられている。しかし、このような外的要因に依存するキャリア選択は、個人の自己実現や創造的な挑戦を奪っている可能性がある。また、内発的動機が弱い背景には、幼少期から日本の教育は正解を求める学習に重点を置いており、創造性や自己表現を奨励する機会が限られている。その結果、学生は自らの興味や価値観を深く探求する機会を持たず、外部から与えられる目標や基準に従うことが習慣化している。この傾向は、就職活動においても現れ、自己の目標や価値観を言語化し、主体的にキャリアを選択する力が欠如しているケースが多い。また、日本社会では失敗に対する否定的な価値観が根底に存在し、挑戦することへの恐怖感が強調される。例えば、キャリアの中で一度でも失敗すると、その後の評価や信頼に大きな影響を及ぼす可能性がある。このようなリスクを回避しようとする心理的障壁が、結果的に安定した選択肢への偏りを生み出している。さらに、治安や貧富の格差が比較的小さい日本では、生活環境が十分に安定しているため、リスクを冒してまで新しい挑戦をする必要性を感じにくい状況にある。理想とも思えるがこの環境下では、死を身近に感じているからこそ失敗や挑戦を恐れず「生」を考え自身の夢や目標に向かって進む推進力は生まれづらいと考える。現在の日本の安定かつ平和の世の中を否定するわけではない。しかし治安が悪く挑戦やリスクを恐れない切迫感の強い意思決定や行動力、いわゆる「負の執着心」のある海外の国々と戦っていかないといけないことを強く認識し、平和で治安がいい中でも「死」を理解し、真摯に向き合うことができれば平和かつ国際的競争力の強い国家へと変貌することが可能なのではないか。また個人としても目標や夢に向かって挑戦する姿勢を取り戻すことができるのではないかと考える。

このような状況下で、本研究から得られた知見に基づくと以下のことが言える。第一に、管理された環境下での疑似的臨死体験プログラムの開発と実施。勉学で学ぶだけではなく、紛争地帯や戦争の跡地、経済的に貧困な地域での生活の実態など直接見て感じるプログラムの開発や導入など疑似的臨死体験を得る機会を作ることが変化をもたらす1歩になるのではないかと考える。第二に、国際的な同世代との交流機会の創出である。日本では答えを求めるカリキュラムが多いのに対して、海外では創造性を問うカリキュラムが多い傾向にある。そのため創造性を問うカリキュラムの導入とともに国際的な交流で創造的なカリキュラムを通して学んだ同世代との交流は重要だと考える。これらの取り組みを通じて、安全な社会環境の中でも挑戦意欲を育む。

7-2 研究の限界

本研究の限界として、DCS は、死を意識する程度を測定するのに適している一方で、「死」と向き合い、「生」を真剣に考えるプロセスを評価するには不十分である。死生観の深層的な変容や、生存に向けた行動の促進には、より多面的な指標が必要である。また、(LSAS-J) は、恐怖心や回避行動を定量的に評価するための有効なツールですが、起業活動やリスクテイクにおける心理的要因を包括的に把握するには限界があり、特に、文化的背景や社会的要因が心理的スコアにどのように影響を与えるかを検討し、内包する必要がある。

第8章 今後の研究

DCS において、死生観や臨死体験の有無は測ることが可能だが、死との距離感は測ることができなかった。例えば日本の死との距離とブラジルの死との距離は違い死への理解も異なる。今後の研究では、「死」の距離感を正確に把握し、「死」と向き合うプロセスや「生」を真剣に考える心理的特性をより詳細に評価するための新しい尺度の開発が必要である。また、臨死体験の有無やその質的側面を評価するアンケートを実施し、個人がどのような状況で死を意識し、それが行動や価値観にどのように影響を与えるかを詳細に検討することが求められる。

海外では研究が続けられているメンタルタフネスの分野からも研究をすることで仮説の検証に大いに役立つと考える。例えば現状戦争を除く地域や国々において最も死に近いのは軍隊であり、折れない心の育て方についてく、研究と教育が行われている場所である。研究結果や死生観教育に関しては機密事項が多いものの、観察やインタビューだけでも全く違う知見があり、「死」と向き合い、「生」を真剣に考えるというプロセスに移行する手がかりになると考える。

さらに、異文化間の比較研究を行うことで、文化的・社会的背景が心理的特性や行動に与える影響をより明確にすることができる。特に、治安や経済状況が異なる国々での調査を通じて、死との距離感が起業活動に与える影響を解明することが重要である。

謝辞

終始熱心なご指導を頂いた経営管理研究科の劉慶紅教授，副査の大藪毅専任講師，林洋一郎教授に感謝の意を表します．

調査の実施及びアンケート徴収にあたり，株式会社 QIQUMO の方々にはひとかたならぬお世話になりました．ありがとうございました．

同ゼミである釜野大典氏，林士容氏，チョウコンシャク氏とはお互いに研究を進め，多くの刺激と示唆を得ることができました．感謝の意を表します．調査にあたっては，大学院の同級生を始め，多くの方々のご協力を頂きました．そして，アンケートに回答して下さった皆様には，感謝の念にたえません．本当にありがとうございました．

第9章 参考文献

- 1) Hofstede. 『Culture's consequences』. 1980.
- 2) 朝倉聡. (2002). Liebowitz Social Anxiety Scale (LSAS) 日本語版の信頼性および妥当性の検討
- 3) 白木三秀. 『国際人的資源管理の視点』. 有斐閣. 2018
- 4) 佐藤博樹. 『組織文化と経営行動』 東京大学出版会. 2020
- 5) Dickstein, L. S. 「Death concern: Measurement and correlates. Psychological Reports」. APA PsycInfo . 1972
- 6) 岩崎美香氏. 「臨死体験による一人称の死生観の変容」. 2013
- 7) 綿谷政江. 「Death Concern Scale (死の関心度尺度) の日本語版作成と大学生における死の関心度」. 1996
- 8) Kenneth Ring 著作
『Life at Death: A Scientific Investigation of the Near-Death Experience』
Coward, McCann & Geoghegan. 1980 年. 310P
- 9) Marat Ressin. 「Start-ups as drivers of economic growth」. 2022
- 10) 城月健太郎. 「社交不安障害の心理学的介入に関する現状と展望」. 2010
- 11) 平井啓. 「死生観に関する研究一死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証一」. 2000
- 12) 田中愛子. 「老年期に焦点をあてた死生観・終末期医療に関する意識調査」. 2002
- 13) Yalom, I. D. 『Existential psychotherapy』 APA PsycInfo. 1980